第七章　薫の物語　宇治を訪問して弁の尼から浮舟の詳細について聞く

［第一段　九月二十日過ぎ、薫、宇治を訪れる］

　宇治の宮を久しく見たまはぬ時は(宇治の宮荘をしばらく訪れていない昨今は)、いとど昔遠くなる心地して(ますます故姉君が遠く離れてしまう気がして)、すずろに心細ければ(なんとも心寂しいので)、九月二十余日ばかりにおはしたり(薫君は九月二十日過ぎに宇治にお出掛けなさいました)。

　いとどしく風のみ吹き払ひて(激しく風ばかりが吹き抜けて)、心すごく荒ましげなる水の音のみ宿守にて(恐ろしいほど荒々しい水かさの増した宇治川の早い流れだけが門番として迎えて)、人影もことに見えず(実際の門番らしき者も居ません)。見るには(この寂れた佇まいを目にして)、*まづかきくらし(薫君は先ず暗い気分になり)、悲しきことぞ限りなき(邸内を進めば、主人が居ないことの悲しみをこの上なく思います)。弁の尼召し出でたれば(薫君は客間に座して、弁の尼を呼び出しなさると)、障子口に(襖戸口の向こうに)、青鈍の几帳さし出でて参れり(青ねずの几帳を立てて出て参りました)。　*「まづ」は全体の第一印象だから、「悲しきことぞ限りなき」の「ぞ」は＜邸内を進み行けば＞が含意されている、のだろう。

　「いとかしこけれど(殿に物越しでお会い申すのは、とても恐縮ですが)、ましていと恐ろしげにはべれば(以前に増して見苦しい風体でございますので)、つつましくてなむ(このような形で失礼致します)」

　と(と弁の尼は)、まほには出で来ず(顔を見せません)。

　「いかに眺めたまふらむと思ひやるに(あなたがどんなに物憂くお暮らしだろうかと思うと)、同じ心なる人もなき物語も聞こえむとてなむ(他には分かり合える人もいない話も相談申したく参上しました)。はかなくも積もる年月かな(いつの間にか過ぎる月日ですね)」

　とて(と言って薫君が)、涙を*一目浮けておはするに(涙を目にいっぱい浮かべていらっしゃるので)、老い人はいとどさらにせきあへず(弁はいっそう涙を堪えられません)。　*「ひとめ」は＜目全体＝目にいっぱい＞ということらしい。

　「人の上にて(故姉君が妹君と匂宮の仲を)、*あいなくものを思すめりしころの空ぞかし(悲観していらっしゃったような一昨年の秋と同じ頃の今日の空模様だ)、と思ひたまへ出づるに(と思い出し申しますに)、いつとはべらぬなるにも(故君が偲ばれますのは、何時という事も無く何時もの事ですが)、秋の風は身にしみてつらくおぼえはべりて(秋の風は身に沁みて悲しく思われまして)、げにかの嘆かせたまふめりしもしるき世の中の御ありさまを(実際今も故君がご心配なさっていたような傍流家の悲哀とも思える妹君の御事情を)、ほのかに承るも(洩れ承りますにも)、さまざまになむ(複雑なご事情かと、思われます)」　*「あいなくものを思すめりしころ」は匂宮が帝に止

められて宇治通いが出来なくなっていたことで＜姉君が妹君を心配していた頃＞のことだろうが、何年前の秋だったかと思えば、まだ二年前のことだ。怒涛の展開だったわけだ。

と聞こゆれば(と弁が申せば)、

「とあることもかかることも(とにもかくにも)、ながらふれば(長い目で見れば)、直るやうもあるを(良い事もあるものを)、あぢきなく思ししみけむこそ(妹君と匂宮との仲を不幸だと極め付けなさったまま、亡くなってしまったことは)、わが過ちのやうに(仲を取り持った私が責められているようで)、なほ悲しけれ(今でも悲しいのです)。

このころの御ありさまは(最近あった匂宮と源氏六姫の結婚という御事情は)、何か、それこそ世の常なれ(特に何事という事もない普通の事柄です)。されど(匂宮が権勢家の姫と結婚したからといって)、うしろめたげには*見えきこえざめり(宮の御愛情は変わりませんので、妹君は心配そうにはお見えでないようです)。言ひても言ひても(何度言ってみても)、むなしき空に昇りぬる煙のみこそ(命尽きて空しく空に昇る煙になるのは)、誰も逃れぬことながら(誰も逃れられないことですが)、後れ先だつほどは(早世というのは)、なほいと言ふかひなかりけり(やはり残念でなりません)」　*「見えきこゆ」の主語は話者の薫君で、目的語は妹君。「きこゆ」は薫君の妹君に対しての謙譲語で＜見え申す＝お見えになる＝思われ申す＞。

とても(と言っては)、また泣きたまひぬ(薫君はまたお泣きになりました)。

[第二段　薫、宇治の阿闍梨と面談す]

阿闍梨召して(それから薫君は、阿闍梨を呼び寄せて)、例の(他ならぬ)、かの忌日の経仏などのことのたまふ(故姉君の三回忌法要で納める経典や仏像の相談をなさいます)。

「さて、ここに時々ものするにつけても(さて、此処に時々亡き御二方をお参りに来るにつけても)、かひなきことのやすからずおぼゆるが(邸内の手入れが行き届かない不甲斐無さに情けなく思えるのが)、いと益なきを(実に不本意なので)、この寝殿こぼちて(この寝殿は取り壊して)、かの山寺のかたはらに堂建てむ(あなたの御寺の一画に、今後お参りすべき故宮と故君を祀る礼拝堂を建てたい)、となむ思ふを(とのように思うので)、同じくは疾く始めてむ(いっそ今から直ぐに取り掛かりたい)」

とのたまひて(と薫君が仰って)、堂いくつ、廊ども、僧房など、あるべきことども、*書き出でのたまはせさせたまふを(堂をいくつに廊下や僧坊など必要な建物などを書き出すように仰せになるのを)、　*「書き出でのたまはせさす」は＜書き出でよとのたまひてさす＞の慣用形、かと思う。「さす」の使役は、話者の薫君が聞き手の阿闍梨になのだろう。

「いと尊きこと(とても立派なお考えです)」

と聞こえ知らす(と言って阿闍梨はそれらを書き出してお知らせ申します)。

「昔の人の、ゆゑある御住まひに占め造りたまひけむ所を(故宮が風情ある御住まいとして領した土地にお造りになった建物を)、ひきこぼたむ、情けなきやうなれど(取り壊すのは、世知辛いようだが)、その御心ざしも功徳の方には進みぬべく思しけむを(八宮の御意向も出家して修行生活に入りたいとお思いだったものを)、とまりたまはむ人びと思しやりて(後にお残りになる姫君たちの生活を思って)、えさはおきてたまはざりけるにや(此処を山荘の寺に寄進なさるようには、ご遺言なさらなかったのでしょう)。

今は、*兵部卿宮の北の方こそは、*知りたまふべければ(今は当荘園は兵部卿宮の奥方が管理なさる権益ですので)、かの宮の御料とも言ひつべくなりにたり(兵部卿宮の御料地とも言うべきものになっています)。されば、ここながら寺になさむことは、便なかるべし(となると、当地をそのまま寺にするということは、許されないでしょう)。心にまかせてさもえせじ(私の一存でそんなことはとても出来ません)。所のさまもあまり川づら近く(また場所柄からしても、あまりに川辺に近く面していて)、顕証にもあれば(気持を鎮めるべき寺としては、明け透けに過ぎるので)、*なほ寝殿を失ひて(荒れるくらいなら、寝殿を失くして)、異ざまにも造り変へむの心にてなむ(寺僧に管理して頂ける礼拝堂を、別に造りたいという気持なのです)」　*「兵部卿宮」は＜匂う兵部卿＝匂宮＞で、「北の方」は＜奥方＝御方＞なので、つまりは＜宇治の妹君＞のことだ。表向きの呼称はこう言うのか、とも思うが、御方を「北の方」と呼称するのは、此処が宇治だからで、都では「対の御方」なのかもしれない。良く分からないが、私の印象では「北の方」は＜総取締＝正妻・本妻＞の語感で、それは対外的には源氏六姫になるのだろう。　*「知る」は此処では＜識る＝管理する＞という語用らしい。尤も、管理権があるという事は所有者でもあって、「しる」は「領る」とも古語辞典に表記がある。　*「なほしんでんをうしなひて」の「なほ」は上文からして＜参拝所が荒れてしまうなら＞という意味だろう。したがって、「異ざまに」は＜管理が期待される形に＞だ。

とのたまへば(と薫君が仰ると)、

「とざまかうざまに(いろいろな事情をお汲み取りなさった)、いともかしこく尊き御心なり(実に深い立派なお考えです)。*昔、別れを悲しびて(昔、故人との別れを悲しんで)、屍を包みて(かばねをつつみて、遺骨を包んで)あまたの年首に掛けてはべりける人も(何年も首に掛けて暮らしていた人も)、仏の御方便にてなむ(ほとけのおおんはうべんにてなむ、故人だけを悼まずに広く世間に布施をすべきだという仏陀の御高説に従うことで)、かの屍の袋を捨てて(その骨袋を捨てて)、つひに聖の道にも入りはべりにける(悩みから解かれて、やがては聖人の列に並ぶ事が出来たのです)。　*「昔、別れを悲しびて～」の法説話は盂蘭盆会の話だろうか。であれば、「つひに聖の道にも入りはべりにける」のは目連という人のことか。何故か注釈も無く、手掛かりに乏しい。とはいえ、「ひじりのみち」の何たるかなど私には分からないので、長々と話されても納得の仕様もないが、此処の文意としては、私心で故人を偲んでいても霊は救われず、法式に則って供養してこそ功徳になる、という寺に都合の良い理屈を阿闍梨は尤もらしく語った、というところだろう。

この寝殿を御覧ずるにつけて(この寝殿を御覧になる事で)、御心動きおはしますらむ(あなた様が心静かにおいでになれないというのは)、一つにはたいだいしきことなり(それ自体が功徳の支障になる大問題です)。また(それに御堂の建立は)、後の世の勧めともなるべきことにはべりけり(後世に供養の見本を示すことにもなります)。

急ぎ仕うまつるべし(直ぐに取り掛かります)。暦の博士はからひ申してはべらむ日を承りて(陰陽師に相談申して吉日を選んで)、もののゆゑ知りたらむ工(寺院様式に精通した建築士の)、二、三人を賜はりて(二、三人を遣わしていただき)、こまかなることどもは、仏の御教へのままに仕うまつらせはべらむ(子細は仏法に則って進めさせようと存じます)」と申す(と阿闍梨は申します)。

とかくのたまひ定めて(薫君はそのように取り決めなさって)、御荘の人ども召して(近くの御自分の荘園の郎党を呼び寄せて)、このほどのことども(この件については)、阿闍梨の言はむままにすべきよしなど仰せたまふ(阿闍梨の指示に従って協力するように申し付けなさいます)。はかなく暮れぬれば(晩秋の日暮れは早く)、その夜はとどまりたまひぬ(その夜は宇治山荘にお泊まりなさいます)。

[第三段　薫、弁の尼と語る]

「このたびばかりこそ見め(是でこの寝殿も見納めか)」と思して(とお思いになって)、立ちめぐりつつ見たまへば(改めて仏間をじっくり御覧になってみると)、仏も皆かの寺に移してければ(祀ってあった仏像も全て山寺に移してあったので)、尼君の行なひの具のみあり(弁の尼君の念仏道具だけが残っていました)。いとはかなげに住まひたるを(とても質素に暮らしている様子なので)、あはれに(感じ入って)、「いかにして過ぐすらむ(どういう思いでいるのだろう)」と見たまふ(と薫君は弁の気持を考えなさいます)。

「この寝殿は、変へて造るべきやうあり(この寝殿は作り変えることにしました)。造り出でむほどは(出来上がるまでは)、かの廊にものしたまへ(廊下部屋の方で念仏を上げてください)。京の宮にとり渡さるべきものなどあらば(京の宮邸に送るべき物があるなら)、荘の人召して(荘園の者を呼んで)、あるべからむやうにものしたまへ(そのように取り計らってください)」

など(などと薫君は)、まめやかなることどもを語らひたまふ(細かなことを弁の尼と相談なさいます)。他にては(この弁の尼以外だったら)、かばかりにさだ過ぎなむ人を(これほど年老いた女房を)、何かと見入れたまふべきにもあらねど(何かと面倒を見なさるような立場では薫君はないのだが)、夜も近く臥せて、昔物語などせさせたまふ(夜も近くに寝かせて、昔話をさせなさいます)。故権大納言の君の御ありさまも(弁は故権大納言の藤原君の御様子を)、聞く人なきに心やすくて(寂れ館が幸いして、誰も聞く者が居ない事に安心して)、いとこまやかに聞こゆ(とても詳しくお話し申します)。

「今はとなりたまひしほどに(藤原君が御臨終とお成りの時に)、めづらしくおはしますらむ御ありさまを(可愛らしくいらっしゃるであろうあなた様の御姿を)、いぶかしきものに思ひきこえさせたまふめりし御けしきなどの思ひたまへ出でらるるに(御覧になりたがっていらっしゃったような御様子などが思いだされますと)、かく思ひかけはべらぬ世の末に(このような思いもしなかった形の私の晩年に)、かくて見たてまつりはべるなむ(このようにあなた様を拝し申し上げるという事を)、かの御世に睦ましく仕うまつりおきし験のおのづからはべりけると(藤原君の御生前に親しくお仕え申した御縁が自然に成した業かと)、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべ

る(嬉しくも感慨深くも存じられます)。心憂き命のほどにて(老醜を曝す長命の所為で)、さまざまのことを見たまへ過ぐし(多くのことに接し過ぎて)、思ひたまへ知りはべるなむ(余計なことを知り過ぎまして)、いと恥づかしく心憂くはべる(昔話をお聞かせ申すのも、実に極まり悪く遠慮申したいところなのです)。

宮よりも(二条院からも)、時々は参りて見たてまつれ(時々は会いに来なさい)、おぼつかなく絶え籠もり果てぬるは(音沙汰もなく田舎に籠もったままなのは)、こよなく思ひ隔てけるなめりなど(ずいぶん薄情なのではないかと)、のたまはする折々はべれど(仰せの向きが度々お手紙にございますが)、ゆゆしき身にてなむ(見苦しい風体なので)、阿弥陀仏より他には、*見たてまつらまほしき人もなくなりてはべる(阿弥陀仏の他にはお会い頂けそうな人もなくなってしまいました)」　*「見奉らむ」の「む」は意志ではなく妥当性の助動詞だから、是は＜お会い申し上げたい＞という言い方ではなく＜拝し申し上げられる＝お会い頂ける＞。「ほし(欲し)」は期待を示すとも言えるのかもしれないが、此処では＜期待される＝望ましい←妥当性がある、合理的だ＞という形容詞だろう。

など聞こゆ(などと弁は話します)。*故姫君の御ことども、はた尽きせず、年ごろの御ありさまなど語りて(故姫君の思い出話もまた尽きること無く、小さい時からの御様子などを語って)、何の折何とのたまひし(あの節句ではこう仰ったとか)、花紅葉の色を見ても、はかなく詠みたまひける歌語りなどを(季節ごとの春の花や秋の紅葉を見ては、感じたことをお詠みになった句を諳んじて)、*つきなからず(弁の声は老人なので子供っぽくはなく)、うちわななきたれど(震え声だったが)、*こめかしく言少ななるものから(臆病で言葉少ないものの)、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ(風情のあった姉君の御性質なら確かにそんな風だっただろうとばかり)、いとど聞き添へたまふ(薫君はますます故君の慕情に駆られます)。　*「こひめぎみ」は亡き姉君だが、姉君を＜姫君＞という弁の言い方に母代わりとして仕えた慈しみが感じられるので、此処はそのまま従いたい。不覚にも涙した。　*「つきなし」は＜似ていない＞。　*「こめかし」は「子めかし」と表記され＜子供っぽい、あどけない、おっとりしている＞と古語辞典にある。が、是は故姉君に対する形容なので、いささか独断に過ぎるかも知れないが、私は＜臆病＞と言い換えたい。

「宮の御方は(妹君の二条院の御方は)、今すこし今めかしきものから(姉君よりは少しはきはきしてして)、心許さざらむ人のためには(気に入らない人に対しては)、はしたなくもてなしたまひつべくこそものしたまふめるを(恥を掻かせるような態度で応対なさるようだが)、我にはいと心深く情け情けしとは見えて(私には思い遣りがあって親切なようで)、「*いかで過ごしてむ(何とか今の関係のままでいたい)」とこそ思ひたまへれ(とお考えのようだ)」　*「いかで過ごしてむ」は御方の内心文らしい。「過ごす」は「過ぐす」の音変化と大辞泉にあり、「過ぐす」は「過ぐ(過ぎる)」の他動詞化した語のようで＜過ぎさせる→済ませる、終わらせる、遣り過ごす＞あたりの言い方らしい。此処では、愛人関係にならずに、友好関係のまま維持する、という意味と取って置く。

など、心のうちに思ひ比べたまふ(などと内心で思い比べなさいます)。

［第四段　薫、浮舟の件を弁の尼に尋ねる］

＊さて（それと）、もののついでに（話の序でに）、かの形代のことを言ひ出でたまへり（薫君は御方が話していらした故君に似た人のことを話題になさいました）。　＊「さて」は上文の話題に関連して別の展開を図る時に使う接続詞で＜それはそうと、ところで＞くらいの言い方が多いように思うが、この展開は本題の付足しの場合もあれば、前段が枕で、此処からが本題の場合もある。で、此処では恐らく後者で、この時期に薫君が宇治へ出向くのも、姉君の一周忌を前にしてのことであれば不自然ではないが、事務連絡は手紙でも着くので、訪問が必然とまでは言えない事情だ。それに、相当刺激的なこの「かたしろ」の話題について、作者は故意に、薫君は御方への執心が強いので然程は乗り気ではない、というハグラカシを敷いていて、そのワザトラシサは滑稽なほどだが、だからといって、此処で段替えをして、そのハグラカシの意図はモロバレだ、みたいな校訂をするのも、いささか大人気無い気もする。とはいえ、モロバレは作者の拙い演出の責任なので、話の内容からして此処での段替えは妥当なのだろうと推測できるわけだが、作者の意図を尊重するなら、せめてせいぜい本当に「もののついで」であったように、この「さて」は言い換えてみたい。と作者に肩入れしたいほど、三段の弁の姉君の思い出話は珍しく優れた筆致だった、ように私には思えた。

「京に、このころ、はべらむとはえ知りはべらず（その人が都に今、出て来ているとは知りませんでした）。人伝てに承りしことの筋ななり（その人のことは、人伝に聞き知った話になりますが）。故宮の、まだかかる山里住みもしたまはず（故宮がまだ此処で山住みをなさる前の）、故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ（奥方が亡くなって程無い頃に）、＊中将の君とてさぶらひける上臈の、心ばせなどもけしうはあらざりけるを（中将の君といって仕えていた上臈の、人品の卑しからざる者を）、＊いと忍びて（故宮は以前から奥方に隠れて）、はかなきほどにもののたまはせける（情人として可愛がっていらっしゃって）、知る人もはべらざりけるに（その事情を知る者も居りませんでしたが）、女子をなむ産みてはべりけるを（その奥方の喪中にその召人が、女子を産み落としましたのを）、さもやあらむ、と思すことのありけるからに（故宮は自分の子らしいと心当たりがおありなので）、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて（間の悪い不都合で厭な事のようにお思いになって）、またとも御覧じ入るることもなかりけり（二度とお会いなさる事も無かったということです）。　＊「ちゅうじゃうのきみ」は注に＜八宮に仕えていた上臈の女房。浮舟の母。＞とある。また、少し後に「母君は故北の方の御姪なり」と語られ、「弁も離れぬ仲らひにはべるべきを、そのかみは他々にはべりて、詳しくも見たまへ馴れざりき」とも補足される。話の順序で印象も少し変わるが、弁の遠縁に当たる、という事情が、「人伝て」にしては詳しい弁の語り内容に説得力を与え、その縁者の存在に親近感を持たせるような気はする。　＊「いと忍びて」は、外に通い歩くわけでもなく、まして奥方も死去していたのに、変な言い方をすると思ったが、この文の構成は「故北の方の亡せたまへりけるほど近かりけるころ」が「女子をなむ産みてはべりけるを」に繋がっていて、「中将の君とて～知る人もはべらざりけるに」が挿入句となっているようで、であれば、故宮が中将の君に手を出していたのは奥方の存命中のこととなるので、この「いと忍びて」はやはり奥方に隠れて不仲を恐れ、要らぬ不穏要素を避けていたという文意に成りそうだ。でないと、故宮が「あいなくわづらはしくものしきやうに思しなり」ぬる妥当性に欠ける。ところで、当該注釈には＜『完訳』は「秘かな情交があったとする。橋姫巻では、八の宮は女性関係とは無縁の俗聖。もっとも、女房との愛人関係、すなわち召人の仲なら、相手の人格を認めるに及ばず、八の宮の生き方を規制しない」と注す。＞とある。確かに、八宮は政治闘争に敗れた厭世観から出家願望があり、この喪中の出産にいよいよ自分の人生の始末の悪さを覚えたかもしれないが、だからこそ「あいなくそのことに思し懲りて、やがておほかた聖にならせたまひにける」と下文に語られるのであって、この時点の八宮を＜橋姫巻では、八の宮は女性関係とは無縁の俗聖＞という指摘にはズレを感じる。まして＜召人の仲なら、

相手の人格を認めるに及ばず、八の宮の生き方を規制しない＞と言うに至っては、そういう面が実際にあるとしても、男女の仲はそういう紋限り口上で片付かないから奥深い物語になるのであって、当物語の注としては、ほとんど暴論のような気さえする。が、この指摘は厳然とした建前社会のあり方を示していて、実は「奥深さ」はその建前として守るべき社会体系があってこそ、その裏側に広がるものなので、その意味では実に興味深い。およそ信仰心を信念と言い代えれば、それは個々人の処世に於いて各人各様に備わっているのだろうが、固定化させた宇宙論から生活信条を教条化させた宗教なるものは、身分社会に於ける特権階級の方便だろう、という私の疑いを見事に言い当てたのが＜召人の仲なら、相手の人格を認めるに及ばず＞聖人然としていられる、という言い方だ。いやしかし、私は、そも聖人然とすることに、秩序を守る姿勢だけは示そうという大人同士の了解事項という冗談気分以外の価値を認めないし、宗教団体には神社庁も含めて不気味さを禁じ得ないが、商売女や商売男が型に収まらない人間生活総体を何とか建前秩序に保たせている、とは信じて疑わない。花無くして何の人生ぞ、とはいうものの、何処に実る保障などあるものか。だったら、実らなくても笑い飛ばすしかないだろ。

あいなくそのことに思し懲りて(故宮はこの巡り合わせをとても否びて情事に気力を失いなさり)、やがておほかた聖にならせたまひにけるを(そのままほぼ聖人生活をなさるようになったので)、はしたなく思ひて、えさぶらはずなりにけるが(中将の君は居た堪れず奉公を辞しましたが)、*陸奥国の守の妻になりたりけるを(陸奥国の守の妻になっていましたのを)、*一年上りて(ひととせのぼりて、ある年に上京しまして)、その君平らかにものしたまふよし(その姫君も元気でいらっしゃるという知らせを)、*このわたりにもほのめかし申したりけるを(この宇治の女房方にもそれとなく故宮にお伝え下さいと申して来ていたのを)、聞こしめしつけて(八宮も聞き知りなさって)、さらにかかる消息あるべきことにもあらずと(一向にそのような話に心当たりはないと)、のたまはせ放ちければ(突き放し申しなさったので)、かひなくてなむ嘆きはべり*ける(母御の中将は情けないと嘆いていたとのことです)。　*「陸奥国の守の妻」は「みちのくにのかみのめ」と読むらしい。このような漢字表記なら分かるが、語りだと多分、私には何を言っているのか分からないだろう。　*「一年上りて」は注に＜後文から八宮の生前の時期と分かる。＞とある。後文というより下文に「聞こしめしつけて」とある。ただ、そういえば、この年で八宮が没して丸三年が経ち、先日四回忌法要が執り行われたという記事もあったが、八宮が宇治に移り住んだのは何時からだっただろうか。橋姫巻から読み直せば新たな発見も有るのかも知れないが、何れ明示は無かったと思うので、むしろ後文に明示を期待して、今は先を急ぎたい。また、「ひととせ」は＜一年間＞をいう場合と＜ある年、先年＞をいう場合があるらしい。此処では後者で、この場合「一年」という漢字表記よりは仮名か「先年」の方が馴染む気がするが、結局は馴れだろうか。　*「このわたり」は＜この宇治山荘の、当時の女房＞らしい。注には＜『集成』は「恐らく、昔の知合いの女房のもとにでも知らせてきたのだろう」。『完訳』は「八の宮の周辺。「ほのめかし」とあり、大君や中の君は知らない」と注す。＞とある。「申したりける」と奉っていないので、八宮宛の手紙ではなかったらしい。　*「けり」は＜～くあり(とのようなことだった)＞という語感の助動詞で、過去の事象を物語る時の言い方だから、正に此処では多用されるが、「ける」はその連体形だから下に＜ものとぞ聞き侍る＞などが省かれた、もう一段遠く引いた表現だ。

さてまた(その後再び)、常陸になりて下りはべりにけるが(亭主が常陸介に任命されて中将も任地へ同道して下っていたということで)、この年ごろ(この数年は)、音にも*聞こえたまはざりつるが(消息を聞いておりませんでしたが)、この春上りて(今年の春に上京して)、*かの宮には尋ね参りたりけるとなむ(二条院の姫宮には連絡をつけて参上したとのように)、*ほのかに聞きはべりし(小耳に聞いております)。　*「聞こえたまふ」の主語は話者の弁で、「聞こゆ」は謙譲の＜申し上げる＞ではなく＜分かっている、理解している←聞いている→聞き知る＞という自動詞で、「たまふ」が聞き手の薫君

に対する丁寧表現のようだ。話の対象である中将の君に敬語遣いは有り得ないだろう。　*「かの宮」は注に＜京の二条宮邸。＞とある。　*「ほのかに聞きはべりし」は＜ちょっと聞いている＞だが、ちょっとにしては結構詳しい。是は御方付きの女房で、中将の君とも親しく、また、中将と弁とが遠縁関係にあるという事を知っている人がいろいろと知らせてきている、という事情によるものらしい。だから弁は、実は細々としたことを知っていそうだが、いかんせん本人自身を直接は知らないようで、それが引いた物言いになっているのだろう。

かの君の年は、*二十ばかりに*なりたまひぬらむかし（その姫君の年齢は二十歳くらいになっていらっしゃるようです）。いとうつくしく生ひ出でたまふがかなしきなどこそ（とても美しくお育ちになったのが愛しいと）、中ごろは（少し前には）、文にさへ書き続けてはべめりしか（その女房への手紙にまでずっと書いて来ていたようです）」　*「はたちばかり」は貴重な年齢明示だ。　*「なりたまふ」と姫には敬語遣いだ。母御の中将の君には敬語が無い。薫君が関心を持っている女ということで、薫君に対する敬意なのだろう。

と聞こゆ（と弁は申します）。

詳しく聞きあきらめたまひて（薫君は弁の話からその姫君のことを詳しく聞いて、その存在を確認なさって）、「さらば、まことにてもあらむかし（それなら、その姫が故姉君に似ているというのも本当かも知れない）。見ばや（会ってみたい）」と思ふ心出で来ぬ（と思う気持ちが出て来ました）。

「昔の御けはひに（故姉君の御姿に）、かけても触れたらむ人は（少しでも似ている人なら）、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを（知らない国までも探して行きたい私なのだから）、数まへたまはざりけれど（故宮が我が子とお認めなさらなかったとは言え）、近き人にこそはあなれ（血縁の近い人なのだから）、わざとはなくとも（わざわざそうすることではないにしても）、このわたりにおとなふ折あらむついでに（あなたに近況連絡があった時にでも）、かくなむ言ひし（私が会いたがっている）、と伝へたまへ（と伝えてください）」

などばかりのたまひおく（とのように薫君は弁に頼み置きなさいます）。

「母君は、故北の方の御姪なり（その姫の母君は、故北の方の姪御なのです）。弁も離れぬ仲らひにはべるべきを（私とも遠くない血縁になるのですが）、そのかみは他々にはべりて（その当時は別々の遠い国にそれぞれ居りまして）、詳しくも見たまへ馴れざりき（詳しくは見知らずに居りました）。

さいつころ（この前）、京より（二条院から）、*大輔がもとより申したりしは（大輔の君から知らせてきた所では）、かの君なむ（かの姫君は）、いかでかの御墓にだに参らむと、のたまふなる（ぜひ故宮の御墓参りだけでもしたいと仰っているようで）、さる心せよ（そのように取り計らえ）、などはべりしかど（と私に言って来ていますが）、まだここに（まだ私に）、*さしはへてはおとなはずはべめり（日取りの知らせはございません）。今、さらば、さやのついでに（そこで、そういうことなら、その際に）、かかる仰せなど伝へはべらむ（今仰せになった殿の御意向をお伝え申しましょう）」　*「大輔（たいふ）」は五章四段に登場した御方付きの筆頭古女房で、薫君も良く見知る者らしく、御方への繋ぎにこの者を介していた。この大輔の君が弁に知らせを遣す女房なら、この女房が中将の君とも旧知の人

物ということになりそうだ。 *「さしはふ」は「差し延ふ」で＜その件に関して実地準備をする＝日取りを知らせる＞ということらしい。

と聞こゆ(と弁は申します)。

[第五段　薫、二条院の中君に宇治訪問の報告]

明けぬれば帰りたまはむとて(夜が明けたのでお帰りになる際に)、昨夜、後れて持て参れる絹綿などやうのもの(昨夜、遅れて届けられた絹や綿類を)、阿闍梨に贈らせたまふ(薫君は従者をして阿闍梨に贈らせなさいます)。尼君にも賜ふ(尼君にも法衣装束をお与えになります)。法師ばら(阿闍梨の弟子たちや)、尼君の下衆どもの料にとて(尼君の雑用係たちの分として)、布などいふものをさへ(麻生地などというものまで用意して)、召して賜ぶ(呼び出して与えなさいます)。心細き住まひなれど(弁たちは物資乏しい心細い暮らしぶりだが)、かかる御訪らひたゆまざりければ(こうした薫君の見舞いが途切れないので)、身のほどにはめやすく(質素に暮らす分には足るを知り)、しめやかにてなむ行なひける(落ち着いて読経修行が続けられます)。

木枯しの堪へがたきまで吹きとほしたるに(木枯らしが堪え難いほどに吹き抜けるので)、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を(一枚たりと残る枝もなく散り落ちて、山道に敷き詰められた紅葉を)、踏み分けける跡も見えぬを見渡して(誰も踏み分けて通った後も見えない山深い情緒を見渡して)、とみにもえ出でたまはず(薫君は直ぐには出発する気に成りなさらない)。

いとけしきある*深山木に(枝だけの姿が冬めくブナの木に)宿りたる蔦の色ぞまだ残りたる(宿り付いたヤドリギの伝い這い茂る枝葉の緑が残っているのを)、こだになどすこし引き取らせたまひて(せめてこの枝葉だけでも少しと、従者に高枝から引き抜き取らせなさって)、*宮へと思しくて(二条院の御方に差し上げるべく薫君はお思いになって)、持たせたまふ(宇治山荘の土産として持たせなさいます)。　*「深山木(みやまぎ)」は山深く生えている樹木で、此処で言う「いとけしきある」は落葉して冬めいているということだろうから、落葉広葉樹のことを言っているのだろうし、その代表的な木はドングリの木のブナという事にして置く。　*「宮」は匂宮ではなくて二条院宮邸の御方のことらしい。

「宿り木と思ひ出でずは、木のもとの旅寝もいかにさびしからまし」(和歌 49-16)

「宿り木が　青春してる　山の秋」(意訳 49-16)

*注に＜薫の独詠歌。『完訳』は「荒涼の宇治で、懐旧と孤独のなかばする歌」と評す。＞とある。当巻名に引かれた歌のようだ。歌筋からすれば、「宿り木」は「やどりぎ」ではなく「宿りき(泊まった事がある)」と読むらしい。「木のもとの」も「このもとの(今回の)」という意味で読むのだろう。しかし勿論、ヤドリギと掛けましては、と自問ながら設題しての歌詠みなのだから、「宿り木と」という詠み出しには＜このヤドリギのような青々しい心で＞が内意されていて、その上で＜此処に泊まったことを思い出さなければ今回の宇治での旅寝はどんなに寂しいものだっただろう＞と言っていることになる。が、是が単なる自答としての感想だとすると、何が言いたいのか分からない。分かるのは、宇治山荘が人気も無く荒れて寂れている、という現状認識で、窮状を覚えてはいるし、佳日への懐古も覚えてはいるようだが、だからといって、佳日の再現や山荘の賑わいを目指したいなどという類の復興意向は示されておらず、つまりは歌としての心の訴えを持っていない。それに、そも是は、下文に「独りごちたまふ」とあるので

外形上は独詠歌にみえるが、上文に「宮へと思しくて」とあるので、薫君の気持としては本質では御方への贈歌なのだろう。そうであって初めて、薫君は自分ひとりだけが青いままだと主張する意味がある。即ち、ヤドリギが示すのは寄生ではなく常緑であり、だから、「宿り木」は御方と共寝をした時の薫君の若い気持で、その思い出があるから、「木のもとの(その元のままの気持での)」「旅寝も(この宇治山荘での今回の一泊も)」「いかにさびしからまし(ひどく寂れた邸内だが、少しも気落ちしない)」と御方への恋心を歌っている、のだろう。

と独りごちたまふを聞きて(と薫君が独詠なさるのを聞いて)、尼君(弁の尼君はこう唱和申します)、

「荒れ果つる朽木のもとを宿りきと、思ひおきけるほどの悲しさ」(和歌 49-17)

「山深さ ヤドリギ残る 有難さ」(意訳 49-17)

*注に＜弁尼の唱和歌。「宿木」の語句を用いて詠む。＞とある。「荒れ果つる朽木」は弁自身を例えた言い方らしい。「かなし」は＜クッとなる→嗚呼と泣けてくる＞みたいな語感で、此処では「悲し」と表記するべきではなく、むしろ＜愛し＞に近く、弁の立場からすれば＜忝し＞更に＜有難し＞くらいの言い方なのだろう。弁が薫君の歌を、御方への贈歌という本心として聞いていたのかどうかは、まだ明かされていない。弁は薫君の歌を、独詠という形を尊重して、決してヤドリギの枝に結び付けないことを前提に、あくまで懐古の情として受け止めて、それに唱和する形で感謝申し上げている。その事の事割りが下文の文意だろう。

あくまで*古めきたれど(弁の唱和歌はまったく古めかしいものだったが)、ゆゑなくはあらぬをぞ(教養のある詠み方なので)、いささかの慰めには思しける(幾分かの慰めには薫君はお思いでした)。　*「ふるめく」は、「朽木」の例えや「かなし」の語用が古風な詠み方だという言い方なのだろうが、それは洒落で、この「古めきたる」は弁の姿勢が＜昔気質の律儀さで挨拶を返した＞という薫君の受けた印象を示しているもの、かと思う。で、それが「あくまで」そういう姿勢を保つという計算の上でのことで、「ゆゑなくはあらぬ(分かっていないわけではない)」ものだという言い方は、弁には薫君の歌意が分かっていたと、暗にと言うより明示で言っているようなものだ。で、その薫君の恋心は許されない横恋慕なので、公然とすべきものでも出来るものでもないのだから、「いささかの慰め」であることが望み得る最良の弁の応対であった事が示されているのだろうし、であるなら、弁が中将の君の娘をどうしても薫君に引き合わせなければならないという事情を心得た、という心証を薫君は得た、ということまで文意するのだろう。

宮に*紅葉たてまつれたまへれば(薫君が二条院に宇治土産のヤドリギの赤枯れ掛かった枝葉をお届けさせ申しなさったところ)、男宮おはしましけるほどなりけり(夫の匂宮がいらっしゃる時なのでした)。　*「もみぢ」と言っても、ヤドリギは常緑木なので落葉樹のように葉だけを枯らして再起を図る事は無く、赤くなっていたのなら枝葉諸共枯れているのだが、「宿りたる蔦の色ぞまだ残りたる」とあったので朽ち果てる前の緑の部分も残っていた枝葉だっと想定して置きたい。ところで、ヤドリギの枝葉が赤枯れていたのなら、その常緑に掛けたと読んだ私の先の薫君の歌意解釈は間違っていたことになる。が、それでも、ヤドリギを＜寄生＞ではなく＜若さゆえ、熱く赤味差す思い＞と取れば大筋では違わないし、より情趣深い。

「*南の宮より(中納言殿からのお届け物です)」　*注に＜薫が使者に言わせた詞。薫の三条宮邸を「南の宮」、匂宮の二条院を「北の院」（宿木）と呼んでいる。＞とある。ただ、「みや」は＜御屋・御家＞という尊称だろうし、「みなみ」は「北の視点」に立って他者を示す言い方だから、薫君の従者が自分の主人を「南の宮」とは呼ば

ないだろう。わが主、とか、我が殿、とか言うんじゃないかな。是は二条院の従者、というか御方の御部屋に取り次ぐのだから、女房の詞と見たい。

とて、何心もなく持て参りたるを(と言って女房が無造作にそのヤドリギの枝葉を対の御部屋に持って参ったのを)、女君(夫人の御方は)、「例のむつかしきこともこそ(また変な手紙でもお遣しか)」と苦しく思せど(と不都合にお思いだったが)、取り隠さむやは(一緒に居る夫に隠せようもありません)。

宮(匂宮は)、「をかしき蔦かな(面白い伝い枝だな)」と、ただならずのたまひて(と興味深そうに仰って)、召し寄せて見たまふ(手許に持って来させて御覧になります)。

御文には(添えられたお手紙には)、

「日ごろ、何事かおはしますらむ(近頃はお変わりありませんか)。山里にものしはべりて(宇治へ行ってきまして)、いとど峰の朝霧に惑ひはべりつる御物語も(ひどく峰の朝霧に迷いました土産話も)、みづからなむ(そのうち伺ってお話し申します)。かしこの寝殿、堂になすべきこと、阿闍梨に言ひつけはべりにき(あちらの寝殿を礼拝堂に作り変えるように阿闍梨に申し付けて来ました)。御許しはべりてこそは(お許しを得た上で)、他に移すこともものしはべらめ(移設に取り掛かる所存です)。弁の尼に、さるべき仰せ言はつかはせ(弁の尼にその旨を仰って下さい)」

などぞある(などとあります)。

「よくも(能くも薫中納言は、私の留守中に御方と面談していながら)、つれなく書きたまへる文かな(情も見せずに、事務的にお書きになった手紙であることよ)。まろありとぞ聞きつらむ(今は私が居ると聞いての事だろう)」

とのたまふも(と匂宮が仰るのも)、*すこしは、げにさやありつらむ(少しは、確かにそうなのかもしれません)。女君は(夫人は変な文面が無くて)、ことなきをうれしと思ひたまふに(事無きを得てホッとなさったが)、あながちにかくのたまふを(夫宮が二人の仲を露骨に疑って嫌味を仰るのを)、わりなしと思して(困ったことだとお思いになって)、うち怨じてゐたまへる御さま(御自身の立場に悩んでいらっしゃる御姿がいたわしく)、よろづの罪許しつべくをかし(どんな罪でも許せそうに、匂宮は責めあぐねなさいます)。　*「すこしは」は、事の本質からすると、このヤドリギに添えた手紙という演出の＜全て＞が匂宮の耳目を憚っての薫君の工夫なのだから、何を今更とも思える判り難い言い方にも見える。が、本質という事なら、匂宮が障壁になっているから薫君は情熱を募らせることが出来ているとも解せるので、そういう視点からすれば、平素は立場を弁えた世話人としての事務的な態度でいることは基本であり、そういう形で公然と御方と連絡を取れることこそが肝要で、現に今回も薫君は正に世話人として山荘の事務処理について御方と身のある相談をしていて、今までもずっとそうして来ているとすれば、今は「まろあり」と聞いていたので、薫君はよりいっそう「つれなく」したかもしれず、その＜いっそう＞が「すこしは」の意味だ。

「返り事書きたまへ(御返事をお書きなさい)。見じや(私は見ないで居ます)」

とて(と言って匂宮は)、他ざまに向きたまへり(余所を向きなさいました)。*あまえて書かざらむもあやしければ(と此処で、この話題をうやむやにして返事を書かずにいるのも却って怪しいので)、　*「甘ゆ(甘える)」は現代語では＜(誰かや世間に)甘ったれる＞だが、此処では御方は夫に甘えているのではない。もし、匂宮のお言葉に甘えるなら、「書かざらむ」ではなく＜書かむ＞でなければ変だ。文法上でも＜奉＞っていない。また、私室での私事で、此処には世間は無い。古語の「甘ゆ」には＜事物を甘くする→曖昧にする→うやむやに誤魔化す＞とい語用があるようで、此処でも匂宮が目を逸らして少し緊張が緩んだ、この隙に乗じて話題を変える、みたいなことを言っているのだろう。しかし、匂宮は御方の愛らしさに負けて詰問は避けたが、疑いが消えたわけでは無いので、誤魔化しは却って疑念を増大しかねない、というのが此処の文意なのだろう。

「山里の御ありきのうらやましくもはべるかな(山里の御外出が羨ましく思えます)。かしこは(あの山荘は)、げにさやにてこそよく(まことに父姉を偲ぶに相応しい)、と思ひたまへしを(と存じておりましたので)、ことさらにまた巌の中求めむよりは(特に他に安置すべき墓石を立てるよりは)、荒らし果つまじく思ひはべるを(山荘を荒れさせないようにしたいと思っておりましたが)、いかにもさるべきさまになさせたまはば(なるほど仰せのように山寺に礼拝堂として移設して頂ければ)、おろかならずなむ(有難いことです)」

と聞こえたまふ(と御方は御返事申しなさいます)。「かく憎きけしきもなき御睦びなめり(これは疑わしい様子もない親身の御相談事のようだ)」と見たまひながら(と匂宮はお思いになるものの)、わが御心ならひに(御自分の浮気性からして)、ただならじと思すが(ただならぬ仲と思われなさって)、やすからぬなるべし(心落ち着かなさそうです)。

[第六段　匂宮、中君の前で琵琶を弾く]

枯れ枯れなる前栽の中に(秋の草花が皆枯れた前庭の植え込みの中に)、尾花の(ススキの尾花が)、ものよりことにて*手をさし出で招くがをかしく見ゆるに(他の草とは違って高く伸びて手招きしている姿が晩秋の風情を漂わせていて)、まだ*穂に出でさしたるも(まだ穂の生え出したばかりのものも)、露を貫きとむる玉の緒(露を数珠繋ぎに付けたようで)、はかなげにうちなびきたるなど(一瞬の美しさを見せて風になびいているのは)、例のことなれど(普通の景色だが)、夕風なほあはれなるころなりかし(夕方の寂しさをなおさら深めていました)。　*「手をさし出で招く」は次に詠まれる歌の前振りではあるらしいが、此処はその文面のままに言い換えて置く。　*「ほ」はイネやムギやススキなどが花実をつける＜穂先＞だが、古語辞典には「秀(ほ、抜き出て秀でたもの・目立つもの)」と同源とあり、「ほ」は「延ふ(はふ、先に延びる・伸ばす)」と類似概念の音感らしく、「穂に出づ」で＜目立つ→表に現れる＞という言い方になるようだ。で、「まだ穂に出で差したる」は＜まだはっきりとは形に表れてはいない＞という御方と中納言の不倫に対する匂宮の疑念を示していて、この情景描写文が改めて匂宮の視点からする心象描写であることを強く印象付ける。だから、「露を貫きとむる玉の緒はかなげにうちなびきたるなど」が「なほあはれ」なのであり、「玉の緒」はまるで隠し撮りした現場写真のようで、もっと言えば濡れた性器のクローズアップで、それを匂宮が想像しているという言い方なのだから、非常にイヤラシイ出色の表現になっている。

「穂に出でぬもの思ふらし篠薄、招く袂の露しげくして」(和歌 49-18)

「篠薄 袖に隠すか 深情け」(意訳 49-18)

*注に＜匂宮の中君への贈歌。『花鳥余情』は「秋の野の草の袂か花薄穂に出て招く袖と見ゆらむ」（古今集秋上、二四三、在原棟梁）を指摘。＞とある。先の「手をさし出で招くがをかしく見ゆるに」の前振りからして、この古今集の歌が下敷きなのは間違いない。「草の袂(くさのたもと)」は文字通り＜ススキの茎＞で、「招く袖」は＜女の誘い＞のことのようだ。尤も、ススキなどのイネ科の穂先を手招きしているようだと見立てるのは、分かり易い見事な例えというより、子供でも思い付く普通の情緒のような気がして、そういう言い方はアリハラノムネヤナの専売特許とは言えないのかも知れないが、ムネヤナは其処に遊びに誘われるかの色気を漂わせた言い回しをモノにしてはいるのだろう。ただ、この古今集の歌は「寛平御時后宮歌合(くぁんぴゃうのおおんとききさいのみやのうたあはせ)の歌」と詞書があるらしく、「穂に出て招く」は田舎の女に誘われたのではなく、皇后の秋の歌会にお招きに与った栄誉を以て表した祝辞、なのだろう。それでも、遊びの華やぎが歌の情趣なのは変わらない。ちょっと気になったのが、「出」は「づ(出る)」というダ行下二段活用動詞だが、接頭語であろう「い」が付くと「出づ(いづ)」と表記され、まるで「出」という漢字が＜い＞と訓読みするかのような表記法がとられているが、分かり易さから来る便法なのだろう。さて、「花薄(はなすすき)」は正にススキの花が穂に付くのだから＜ススキの穂＞を示すが、「篠薄(しのすすき)」は＜穂が出始めたススキ＞のことを言う一般語なのだろうか。もし、そうだとするなら、「篠(しの)」に＜小さい、細かい＞みたいな語感があることになるが、少なくも此処での語用には「忍ぶ(隠れる、隠す)」に掛けた洒落はあるだろう。「穂に出づ」は＜目立つ＝目に付く＝形になる＞だが、この「穂に出でぬ」は＜形になっていない＞という外形ではなく＜言葉にしない＞という御方の意志を言っているのだろう。匂宮は庭のススキを見て、その秋の深まりの感想を述べている体で、その実は、口にはしないが思っているらしい私に隠したあなたの中納言を誘う手招きはずいぶん情が深そうだ、みたいな口振りでお方を責める、という趣向。

なつかしきほどの御衣どもに(匂宮はこうお詠みになって、着慣れた御着物に)、*直衣ばかり着たまひて(普段着の上着だけをお召しになって、廂の間に出て)、琵琶を弾きゐたまへり(琵琶を弾いていらっしゃいました)。*黄鐘調の*掻き合はせを(黄鐘調の流し弾きを)、いとあはれに弾きなしたまへば(とても情緒豊かに鳴らしなさると)、女君も心に入りたまへることにて(夫人もお好きでいらっしゃる音色だったので)、もの怨じもえし果てたまはず(悩み込んでばかりもいらっしゃらず)、小さき御几帳のつまより(小さい御几帳の端から)、脇息に寄りかかりて、ほのかにさし出でたまへる(脇息に寄り掛かって、ちょっとお出しになるお顔が)、いと見まほしくらうたげなり(実に申し分なく可愛らしい)。　*「なほしばかりきたまひて」は「御衣ども」姿でいらっしゃった閨から廂に、少なくも廂側には、出て庭を眺めなさった、という場面かと想像して補語する。　*「黄鐘調」は「わうしきでう」とローマ字表記があるので＜おうしきじょう＞と読むらしい。「黄鐘(わうしき)」という中国式音階名の音（A 音とのこと）を基音とする調律法およびその音階で演奏する曲のことらしいが私の耳には何も鳴らない。イ短調(Am)と解説してあるウエブサイトもあったが、ユーチューブでアップされていた「黄鐘調」とされる演奏を聞いても、西洋式流行歌とはやはり別物に思える。が、其等の動画を見聞きしても、この場面の匂宮の演奏が想像できない。　*「かきあはせ」は古語辞典に＜ためしびき＞とある。「黄鐘調の掻き合はせ」は特定の曲では無く、黄鐘調に調弦された琵琶を下ろし弾きしたり、一本づつ鳴らしていたのかもしれない。その場のその間に流れる音色がどんな情感だったのか具体的には全く分からないが、上品な華やぎの中で鳴り過ぎず泣き過ぎない乾いた音が良く通るしっとりとした味わいだったように思って置く。

「秋果つる野辺のけしきも、篠薄ほのめく風につけてこそ知れ　(和歌 49-19)

「篠薄 飽きも果てると 知らす風　(意訳 49-19)

*注に＜中君の返歌。「篠薄」の語句を用いて返す。＞とある。此方も晩秋の風情を詠んでいて。その限りでは返歌というよりは唱和歌の趣きだ。が、「秋果つる野辺のけしきも」は＜あなたが飽きてしまったこの田舎娘の立場も＞で、「篠薄ほのめく風につけてこそ知れ」が＜晩秋を知らせる秋風に思い知らされる＞ということで、しっかりと嫌味で返歌している。この「しのすすき」も＜忍ぶ＞が掛かっているが、この「忍ぶ」は＜隠れる＞ではなく＜悲しみに堪える、しのび泣く＞の意味で「野辺のけしき」を感情修辞しつつ、「薄」に御方自身を例えて形容修辞する。

*わが身一つの(それが私の運命でも‥)」　*注に＜歌に添えた詞。古歌の引用。『源氏釈』は「大方の我が身一つの憂きからになべての世をも恨みつるかな」（拾遺集恋五、九五三、紀貫之）を指摘。＞とある。この引歌は＜ほとんどは自分自身の情けない事情による悩みなのだが、失恋は世の中の所為にしてしまうものだ＞ということで、古今東西に通じる普遍的な思いのように見える。だから、共感は得るだろうが、特に気の利いた言い回しでも、語呂が良いわけでもなく、名調子・名文句ではない気がするが、有名で引き易いのだろう。

とて涙ぐまるるが(と返歌して御方は涙ぐまれて来るのが)、さすがに恥づかしければ(さすがに恥ずかしいので)、扇を紛らはしておはする御心の内も(扇で隠していらっしゃる御心中も)、らうたく推し量らるれど(匂宮にはいじらしく思い遣られなされるが)、「かかるにこそ(こういう可愛さだから)、人もえ思ひ放たざらめ(中納言も諦め切れないのだろう)」と、疑はしきがただならで(と疑わしさが非常に強く)、恨めしきなめり(憎らしく思うのでしょう)。

菊の、まだよく*移ろひ果てで(菊がまだ紫に変色し切らずに)、わざとつくろひたてさせたまへるは(この二条院の菊は特に念入りに手入れをさせ為さっていることが)、なかなか遅きに(却って変色を遅らせているのだが)、いかなる*一本にかあらむ(どういう一本なのだろうか)、*いと見所ありて移ろひたるを(とても見事に紫に変わっているものを)、取り分きて折らせたまひて(匂宮は庭の童女に、選んで手折らせなさって)、　*「移ろひ果つ」は＜色が変わり果てる＞で、白菊が紫に変色することを愛でたことから来る言い方らしい。が、この変色は寒さに傷付いた褪色のようだ。酸化だろうか。で、此処の文意も、その霜焼け現象を認識していて、二条院の菊は手入れがいいから変色が「なかなか遅きに」、それでも「一本(ひともと)」だけ変色していた、ということらしい。この文の主語は匂宮なので、作者は読者にこの語り口で＜匂宮が御方を手厚く遇しているので、そう簡単には心変わりしていないが＞と読ませる心算なのだろう。*「ひともと」は＜ある因縁＞とか＜同じ血縁＞を示す言い方でもある。この物語では「紫の所縁」として若紫の発見を印象深くする下敷きに、古今集 867 番の「むらさきの ひともとゆゑに むさしのの くさはみながら あはれとぞみる」が引かれていた。　*「いと見所ありて移ろひたる」は＜中納言がとても魅力があって、あなた(御方)が心変わりした＞と思う匂宮の嫉妬を示している、のだろう。

「*花の中に偏に(何も無闇に拘らない)」　*注および出典参照に＜匂宮の詞。『源氏釈』は「不是花中偏愛菊(これ花の中に偏へに菊を愛するのみにあらず)、此花開後更無花(此の花開けて後更に花の無ければなり)。」（和漢朗詠集、菊、元稹）を指摘。＞とある。元稹(げんしん)は白居易の親友で反骨の官吏だったらしい。何も無闇に菊を愛でるのではない、この花が咲き終わった後の花が無いからだ、という言い方で、この漢詩は宴の終わりを惜しむか、友との別れを惜しむかしていて、それに準じれば私には＜霜枯れ＝惜別感＞に思えるが、此処でこの句を匂宮が引いた意図は、むしろ＜変色＝御方の心変わり＞に見えて、当文の文意に混乱する。いっそ重ねて、心変わりしたあなたを失うのが辛い、とまで読むべきだろうか。でも、それじゃまるで御方の言い分だ。菊は何の象徴か。御方を例えているのではないのか。いや、上文の「恨めしきなめり」を真に受けるなら、もしや匂宮は「此花開後更無花」は省いて、「不是花中偏愛菊」だけを取り出して＜何も無闇に御方に執着はしない＞と投げ遣りな気分にな

った、ということがあるのかもしれない。今はちょっと掴み所がないが、取り敢えず「不是花中偏愛菊」だけの文言について、更に「愛菊」の具体表現まで避けた曖昧な言い方で言い換えて置く。

と誦じたまひて(と漢詩の一節を朗詠なさって)、

「*なにがしの皇子の(醍醐天皇の第十王子であった源高明卿が)、花めでたる夕べぞかし(菊花を愛でていた夕方でしたよ、確か)。いにしへ、天人の翔りて(昔、天人が翔け降りてきて)、琵琶の手教へけるは(琵琶の秘曲を教えたというのは)。何事も浅くなりにたる世は(そういう情緒深さが無くなって、何事も表面の形だけになった今の世の中は)、もの憂しや(嘆かわしい)」　*「なにがしのみこ」は注に＜以下「もの憂しや」まで、匂宮の詞。源高明の庭の木に霊物が降りて、小児の口をかりて前掲の元槙の詩句を口ずさんで、琵琶の秘曲を伝授したという故事（河海抄、指摘）を踏まえる。＞とある。仔細不明の故事ながら、匂宮はこの故事を情趣豊かな逸話として取り上げているようだ。源高明(みなもとのたかあきら)は光源氏に見立てられた人物というのが有力な一説らしく、大辞泉には＜［914〜982］平安中期の公卿。醍醐天皇の皇子。通称、西宮左大臣。源の姓を賜り、臣籍に降下。安和(あんな)の変で大宰権帥(だざいのごんのそち)に左遷。学を好み、有職故実に詳しかった。著「西宮記」。＞とある。「なにがし」は、実際には固有名詞を言ったものを架空物語の普遍性を旨に伏せられた表現、とはこの物語の注釈で何度も説明されて来た。であるなら、こんなにはっきり出典が分かっているものは、いっそ明示補語したい。

とて、御琴さし置きたまふを(と言って琵琶を弾くのを止めておしまいになるのを)、口惜しと思して(夫人は残念にお思いになって)、

「*心こそ浅くもあらめ(人の気持はうわべを取り繕うだけの浅い関係の世の中になっていても)、昔を伝へたらむことさへは(昔のままに伝わっている筈の音楽までは)、などてかさしも(どうしてそんなに廃れていましょうか)」　*「心こそ浅くもあらめ」は今の私の実感だが、今よりはずっと地に足が着いていただろうと当時の生活を考えがちだが、意外に人間関係の厳しさや複雑さの心理負担は当時と今とでも似ていて、生活様式は今の方が平均で見れば格段に楽になっているだろうに、人間の意識、特に生活感は身近な人間関係に圧倒的に左右されるもので、現代の社会構造などを複雑だからと難しく考えてみても、ヒトの悩みの生理作用は昔と同じってことかもしれない。それにしても、是は相当に興味深い文だ。

とて(と言って夫人は)、おぼつかなき手などをゆかしげに思したれば(知らない曲をお聞きになりたそうにお思いのようなので)、

「さらば、独り琴はさうざうしきに(では、私一人で弾くのはつまらないので)、さしいらへしたまへかし(あなたもお相手なさい)」

とて(と言って匂宮は)、人召して、箏の御琴とり寄せさせて(女房に言い付けなさって、十三弦箏を持って来させて)、弾かせたてまつりたまへど(夫人に弾かせ申しなさるが)、

「昔こそ(以前は)、まねぶ人もものしたまひしか(見習える父宮がいらっしゃいましたが)、はかばかしく弾きもとめずなりにしものを(私は上手く弾けるまでになりませんでしたので)」

と、つつましげにて手も触れたまはねば(と御方は気が引けて楽器に手も触れなさらないので)、

「かばかりのことも、隔てたまへるこそ心憂けれ(こんな事で遠慮なさることの方が情けない)。このころ、見るわたり(最近結婚した六条院殿は)、まだいと心解くべきほどにもあらねど(まだ気心が知れてはいないが)、かたなりなる初事をも隠さずこそあれ(満足に出来ない不慣れな事でも隠そうとはしません)。すべて女は(何につけても女は)、やはらかに心うつくしきなむよきこととこそ(頑なにならず素直なのが良いと)、その中納言も定むめりしか(あなたの後見者の中納言も確か評定していたようですがね)。かの君に、はた、かくもつつみたまはじ(あの方には別にこのような隠し立てはなさらないのでしょうね)。こよなき御仲なめれば(この上なく親密な御仲のようですので)」

など(などと匂宮が)、まめやかに*怨みられてぞ(具体的に問い詰めなさってくる気配なので)、うち嘆きてすこし調べたまふ(御方はその追及をはぐらかして交わすためにも溜息混じりに困りながら少し箏をお弾きになります)。*ゆるびたりければ、盤渉調に合はせたまふ(絃が緩かったので盤渉調に調律なさいます)。掻き合はせなど(馴らし弾きの)、爪音けをかしげに聞こゆ(爪音は風情良く聞こえます)。「*伊勢の海」謡ひたまふ御声のあてにをかしきを(催馬楽の「伊勢の海」を謡いなさる御方の声が上品で美しいのを)、女房も、物のうしろに近づき参りて、笑み広ごりてゐたり(女房たちも間仕切りの後ろに近付き寄って、和やかに結構な風情と取り巻いていました)。　*「うらみられてぞ」は＜怨みられたまふさまにてぞ＞を短縮して急展開や緊迫感を表現する言い方、かと思う。　*「ゆるびたりければ」は＜久しく使わなかったので、絃が緩んでいた＞ということらしい。確かに、気が緩むような寛いだ場面ではなさそうだ。が、弦の張が緩いと「盤渉調(ばんしきでう)」に合わせるのが良い、という理屈は私には全く分からない。「盤渉」は＜日本音楽の十二律の一。基音の壱越(いちこつ)より九律高い音で、中国の十二律の南呂(なんりょ)、洋楽のロ音にあたる。＞と大辞泉にある。素養が無いから、何を言っているのか分からない。　*「伊勢の海」は出典参照に＜「伊勢の海の　清き渚に　しほがひに　なのりそや摘まむ　貝拾はむや　玉や拾はむ」(催馬楽-伊勢の海)＞とある。「しほがひ」は「潮間」で＜潮の引いている間＞とのこと。「なのりそ」はホンダワラ(海草)の古名で、「名告りそ」が＜名のってくれるな＞、「な告りそ」が＜何も言ってくるな＞という言い方であることから、歌では良く洒落語用されるらしい。「たま」は真珠らしい。活気があるお目出度い歌のようだし、催馬楽なんだから色っぽい遊び気分もあるんだろう。

「二心おはしますはつらけれど(宮様に二心があるのは辛い事情だが)、それもことわりなれば(それも権勢家ならではの処世であってみれば)、なほわが御前をば(やはり我が主人たる御方様は)、幸ひ人とこそは申さめ(幸い人と申せましょう)。かかる御ありさまに交じらひたまふべくもあらざりし所の御住まひを(このような上流社会に仲間入り出来そうも無かった宇治での山里暮らしを)、また帰りなまほしげに思して、のたまはするこそ、いと心憂けれ(また帰りたそうに思い仰るのは、とても心配な話です)」

など(などと古女房が)、ただ言ひに言へば(言いたい放題に言うと)、若き人びとは(若い女房たちが)、「あなかまや(お静かに)」など制す(などと制します)。

[第七段　夕霧、匂宮を強引に六条院へ迎え取る]

御琴ども教へたてまつりなどして(匂宮は御方に琵琶や箏などお教え申しなさったりしながら)、三日、四日籠もりおはして(みかよかこもりおはして、三日四日と二条院に籠もっていらっ

しゃって)、御物忌などことつけたまふを(謹慎日に当たるからと言い訳なさって六条院にお出向きなさらないのを)、かの殿には恨めしく思して(六条院殿に於かれては不満にお思いで)、大臣(おとど、源氏大臣が)、内裏より出でたまひけるままに(御所からのお帰りがてらに)、ここに参りたまへれば(この二条院に参上なさったので)、

宮(匂宮は)、「ことことしげなるさまして(仰々しく大勢を引き連れて)、何しにいましつるぞとよ(何しに出ていらっしゃったのか)」と、むつかりたまへど(と不愉快に思われなさるが)、＊あなたに渡りたまひて、対面したまふ(寝殿に出向きなさって、舅と対面なさいます)。　＊「あなた」は西の対から見ての＜寝殿＞らしい。

「ことなることなきほどは(特に用事も無かったので)、この院を見で久しくなりはべるも(この院に来ないのも長くなったが)、あはれにこそ(懐かしい)」など(などと源氏大臣は)、昔の御物語どもすこし聞こえたまひて(昔話なども少しお話し申しなさって)、やがて引き連れきこえたまひて出でたまひぬ(そのまま匂宮を引き連れ申し上げなさって六条院へお帰りなさいます)。

御子どもの殿ばら(御子息の参議殿たちや)、さらぬ上達部(以下の幹部)、殿上人なども(管理職なども)、いと多くひき続きたまへる勢ひ(とても大勢従えなさった威勢の)、こちたきを見るに(無類さを見るに)、並ぶべくもあらぬぞ(とても御方では六条院殿に並び立てるものではないと)、屈しいたかりける人びと覗きて見たてまつりて(つくづく思い知らされた女房たちが大臣を覗き見申し上げて)、

「さも、きよらにおはしける大臣かな(何と立派でいらっしゃる大臣だこと)。さばかり、いづれとなく(さすがに皆)、若く盛りにてきよげにおはさうずる御子どもの(若い盛りで美しくいらっしゃる御子息方でも)、似たまふべきもなかりけり(及びも付きなさらないようです)。あな、めでたや(本当に素晴らしい)」と言ふもあり(と言う者もいます)。

また(また別には)、「さばかりやむごとなげなる御さまにて(これほど圧倒的な御威勢で)、わざと迎へに参りたまへるこそ憎けれ(これ見よがしに宮様を迎えに参上なさるというのは嫌味です)。やすげなの世の中や(落ち着かない世の中ですよ)」など、うち嘆くもあるべし(などと愚痴る者も居るようです)。

御みづからも(御方御自身も)、来し方を思ひ出づるよりはじめ(是までの経緯を思い出せばもとより)、かのはなやかなる御仲らひに立ちまじるべくもあらず(このような華やかな上流社会に身を置けるはずもない)、かすかなる身のおぼえをと(有力縁者のない立場の自覚に)、いよいよ心細ければ(いよいよ心細くなるので)、「なほ心やすく籠もりゐなむのみこそ目やすからめ(やはり静かに山里に引き籠もるのが無難そうだ)」など、いとどおぼえたまふ(などを改めてお思いになります)。

はかなくて年も暮れぬ(こんな調子のまま、この年は暮れました)。